知られざる赤水の天文学 ③

寄稿

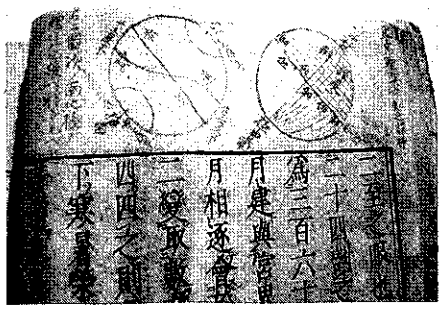
長久保赤水顕彰会長
佐川 春久

国の重要文化財に指定された「天経或問（かぎ）（しゅん）天」には、長久保赤水が猛勉強をしたその上欄に、朱書で赤道や黄道（太陽の通り道）、経度即東西とあり、墨書で緯度とある2図が描かれ、また、赤水の朱書で「右二図、次ノ南北ノ標柱也、後へ移シ見ベシ」と書かれている。この本には、星が1等から6等まで描かれ、天体の動きや木星・土星などが描かれている。よく見ると驚くことに、土星には輪があるように描かれている。この「天象管闚鈔（き）」には1791年に長久保赤水が大坂で著した和文体の初級星座早見書が付いている。「天象管闚鈔」の序文は京都五山の第2、相国寺住職、北禅竺常（尊称・大典禅師…1719～1802年）が書いた。諱（いみな）は顕常。大典は号。北禅竺常は赤水の師である鈴木玄淳の「和漢年代歌」の序も書いた。

書物に勉学の跡残る

この「天象管闚鈔」には「天文学は学問を始めたばかりの者が、何を差し置いても、先ず最優先に学ばなければならないというものではない。とはいうものの書経にあるように、中星の南中を測定する事によって、季節の移ろいを正確に知る事ができるという事や、春秋左氏伝においては周の暦に基づく事象記載が記事構成の基本になっている事など、天文知識がないと、聖人たちが制定した礼制の意味するところを知ることができない。初学者といえども、そのように意識しないといけない」とある。

農民出身の赤水は、四季折々の天体観測により、すでに、農作業の種まき時期などを知っていたと思われる。赤水は儒学を30代後半で大成した後に、中国の天文・地理の学問を学んでいる。長久保赤水顕彰会が高萩市歴史民俗資料館に寄贈した漢書、「春秋左氏伝」や「書経巻之二」「漢書評林之九十六」などの中には、中国の歴史や地図原稿の多くの書き込みが見られる。



重要文化財＝典籍類NO・二六九「天経或問 天」。高萩市歴史民俗資料館所蔵資料（長久保赤水顕彰会寄贈）

長久保赤水の儒学者としての勉学の跡が残されている。これら数多くの漢籍による知識がその後の地図作成の大きな基礎となっている。また、後年、水戸6代藩主、徳川治保公の侍講として抜擢される要因となる数多くの古代中国の聖王学や天文学の知識を、すでにこの頃から育んでいたのだ。天文学は儒学を学ぶ上での必須事項でもあったことが分かる。（「長久保赤水の天文学」11ページ参照）

（次回は25日掲載）

県北

■日立支社
日立市
高萩市
北茨城市
☎0294(22)4466
ファクス(22)4480

■常陸太田支局